

八月に紫禁城についてのビデオを何本か見た。建設されて六〇〇年経つこの建物の主人公は、史料がたくさんある最後の数名の皇帝だ。特に宣統帝溥儀は六歳で退位した後も紫禁城に十数年住んでいたもので、多くの話が残っている。その紫禁城で彼が十七歳の時結婚した婉容はアヘン中毒になった。

アヘンというと、密輸、アヘン戦争、廃人、アヘン窟など十九世紀から二〇世紀初めにかけての暗い話題が思い浮かぶ。世界各地のチャイナタウンのアヘン窟で、横になりながら長いキセルを使ってアヘンを吸い、意識がもうろうとしている人たちの絵や写真は本・映画で見ることができる。こういう話はすっかり過去のことだと思っていた。

しかし、この思いは五、六年前にカナダのブリティッシュ・コロンビアの州都ヴィクトリアに行った時に消えた。ヴァンクーヴァー島の南端にあるヴィクトリアでチャイナタウンを歩いていたら、薄暗く狭い路地にある家の扉に *opium* という文字が書いてあった。二十一世紀の今では *opium* (アヘン) は当然有害な違法薬物扱いである。なぜこの言葉が書いてあるのか、最初は興味津々だった。まず、頭の中で *opium* の意味を確認し、次にこの家は一体何をするところなのか考えた。アヘンの博物館なのか、それともアヘンの販売所なのか、ふざけた表示板なのか。あつ、そんなことを考えている場合ではない、中から人が出てきたら大変だ、慌ててその場を離れた。

後で調べてみると、アヘンはヴィクトリア、ヴァンクーヴァー、サンフランシスコなど北米の西海岸からカナダやアメリカの内部に持ち込まれた。一八八〇年代にカナダ・パシフィック・レイルウエーができて、大勢の中国人労働者を輸送できるようになると、ヴィクトリアに多くのアヘン工場ができた。一八八〇年にはアメリカ合衆国と中国の間で、アメリカは中国から直接アヘンを輸入しないという協定が結ばれていたの、ヴィクトリア経由で中国のアヘンをアメリカに運んだということだった。

あの家の一帯はまだ無法地帯だったのだろうか。今考えると恐ろしい。